



👁️👁️ みどころ

邦題だけ見ても何の映画かわからないが、モーゼの「十戒」の最新版と聞けば、多くの日本人はわかるはず。また、「ノアの方舟」を知っている人は、聖書に書かれている「出エジプト記」の物語も知っている。さらに、天童よしみが「海が割れるのよ、道ができるのよ」と歌った『珍島物語』の歌詞と同じスペクタクルな情景もすぐ目に浮かぶはずだ。

しかし、サブタイトルの神とは誰？そして王とは誰？ヘブライの民を奴隷から解放するためモーゼはいかなる要求を突きつけ、いかなる強硬手段をとったの？また、それをサポートするため「神」が見せた「10の奇跡」とは？そして、その残虐性とは？

イエス・キリストはもちろん、神もスクリーン上に登場しないのが通常だが、リドリー・スコット監督があえて本作で見た神の正体とは？そして、「出エジプト」を成功させた後、その神との契約として成立した十戒（＝律法）の位置づけとは？イスラム（国）によるテロが過激化している今、本作を鑑賞するについては、そのスペクタクル性と映像美を楽しむとともに、そんな律法についてもじっくり考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ ノアに続いて、モーゼが登場！ ■□■

言うまでもなく、世界のベストセラー（小説）は聖書。その旧約聖書の「創世記」に書かれている、ラッセル・クロウが主演した『ノア 約束の舟』（14年）で「ノアの箱舟伝説」が映画化された（『シネマルーム33』196頁参照）と思ったら、次は旧約聖書の「出

エジプト記」に書かれているモーゼの物語が本作で映画化されたから、ビックリ！「モーゼ」と言えば「十戒」。「十戒」と言えば「モーゼ」。私たち団塊の世代なら誰でも、チャールトン・ヘストンが主演したセシル・B・デミル監督の名作『十戒』（56年）をよく覚えている。そのクライマックスは、天童よしみが名曲『珍島物語』で歌った「海が割れるのよ、道ができるのよ」「こちら珍島から、あちら芽島里まで」の歌詞とはケタ違いのスケールで海が割れた、あの奇跡のシーン。多くの人がそれを今でもよく覚えているはずだ。

あれから約60年。ラッセル・クロウ主演の大作『グラディエーター』（00年）で第73回アカデミー賞作品賞等を受賞した後も、『ロビン・フッド』（10年）（『シネマルーム25』17頁参照）、『プロメテウス』（12年）（『シネマルーム29』230頁参照）等々の名作を次々と世に送り出している、巨匠リドリー・スコットは、なぜ今モーゼを描こうとしたの？

本作はリドリー・スコット監督の新たな視点による「出エジプト記」とモーゼをテーマとした映画だから、セシル・B・デミル監督の『十戒』のリメイクではない。しかし、多くの観客に「名作」として強い印象を残している映画と同じテーマの名画を後から作った場合、前作を越えるのが難しいことは、黒澤明監督の『姿三四郎』（43年）、『椿三十郎』（62年）、『隠し砦の三悪人』（58年）のリメイクを観ても明らかだ。それを十分わかったうえで、あえて挑戦したりドリー・スコット監督の本作は、さて？

■□■まずは、カデシュの戦いと兄弟の確執に注目！■□■

日本人は、「関ヶ原の戦い」や日露戦争における旅順の攻防をめぐる「二〇三高地の激戦」、
「日本海大戦」をよく知っている。さらに、イギリス海軍を率いたネルソン提督がスペインの無敵艦隊を破った「トラファルガーの海戦」や三国志にみる「赤壁の戦い」はよく知っている。しかし、『皇帝と公爵』（12年）で観た「プサコの戦い」は知らないはず（『シネマルーム32』280頁参照）。また、『300 スリー・ハンドレッド』（07年）で観た、紀元前480年に300人のスパルタ兵が100万人のペルシャ兵と戦った「テルモピュライの戦い」（『シネマルーム15』51頁参照）や『300<スリーハンドレッド>〜帝国の進撃〜』（14年）で観た「サラミスの海戦」（『シネマルーム33』202頁参照）も知らないはず。したがって、本作にみる、紀元前1274年にエジプトがヒッタイト族と戦った「カデシュの戦い」も知らないはずだ。

『十戒』の導入部では、第1にナイル川に流される籠に乗った赤ちゃんを、沐浴していたエジプトの王女ベシアが拾い、わが子として育てるシーンが印象的だったし、第2に青年になったモーゼが国王の命令に従って国づくりに邁進する姿が印象的だった。それに対して、本作では映像の巨匠リドリー・スコット監督らしく、エジプト軍がヒッタイト族と戦うカデシュの戦いの戦闘シーンが前半のハイライトとなる。モーゼ（クリスチャン・ベール）はセティ国王（ジョン・タトゥーロ）の信頼が厚いが、この戦いでエジプト軍を率

いる総大将は、当然王子のラムセス（ジョエル・エドガートン）だ。

パンフレットによれば、カデシュの戦いは「軍による最大の戦いと言われ、何千人もの兵士と何百台ものチャリオット（二輪戦車）が照りつける太陽の下で戦った」らしい。そこで危機に陥ったラムセスを、



エクソダス：神と王 DVD発売中 20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン
(C) 2015 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.

わが身の危機も省みず助けたのがモーゼ。モーゼにしてみれば、兄弟同然に育てられたラムセスが危険な状態にあるのを見た以上、当然の行動だったが、それが戦いの前に巫女が告げた「王子を助けた者が国を支配する」とのお告げと重なったため、ラムセスは不機嫌に。そして、それは、常々わが子ラムセスよりも文武ともに秀でているモーゼのことを疎ましく思っていた王妃トゥーヤ（シガーニー・ウィーヴァー）も同じだった。したがって、戦勝軍を迎えるエジプト国民が「王子ラムセス！」ではなく、「モーゼ！モーゼ！」と連呼している姿を見ると、ラムセスの気持は・・・？

まずは、映像派の巨匠らしい「カデシュの戦い」にみるスペクタクルシーンの美しさを堪能するとともに、そこでの勝利から生まれる兄弟の確執を、しっかり確認したい。

■□■モーゼの出生の秘密とは？それを知ったライバルは？■□■

本作前半のハイライトは「カデシュの戦い」のスペクタクルシーンだが、モーゼがヘブライ人であるという出生の秘密を知ることになるストーリーや、それを聞いたラムセスがどんな行動をとるかというストーリーも、本作前半の面白い人間ドラマとなる。私が日本映画最高の傑作と位置づける、松本清張原作、野村芳太郎監督の『砂の器』（74年）でも、主人公・和賀英良の出生の秘密が「父親殺し」という事件に結びつく人間ドラマのポイントになっていた。

モーゼがヘブライ人であるという出生の秘密をはじめて聞かされたのは、国王の命に従ってモーゼがヘブライ人奴隷たちが働くビトムの町の視察に赴いたとき。そこで自らの不正・腐敗を暴露された総督ヘゲップ（ベン・メンデルゾーン）がモーゼを逆恨みしたのはやむをえないが、ヘブライ人の長老ヌン（ベン・キングズレー）がモーゼに話した出生の秘密を、ヘゲップに聞かされたのはまずかったようだ。ヘゲップがこれ幸いと、国王亡き後エジプト王の地位についたラムセスに対して、モーゼの出生の秘密を告げ口したのは仕方ないところだ。もっとも、太っ腹の国王であれば、そんな話は一笑に付してしまうところだが、モーゼの実力に関心不安に感じていたラムセスは、いかなる行動を？

子守り役としてモーゼを育てたのは、姉のミリアム（インディラ・ヴァルマ）。そして、モーゼの母親になっていたのは、叔母のピティア（ヒアム・アッバス）だった。しかして、ラムセスがこの2人を呼び出して、「ホントのことをしゃべれ！」と命じたところまでは、告げ口を聞かされた国王として当然の行動かもしれない。しかし、「モーゼはヘブライ人の子か？」というラムセスの質問に対して、「ちがいます」とミリアムが明確に答えているにもかかわらず、「NOと言えは腕を切り取ってしまうぞ」と脅しをかけて「自白」させようとしたのはナンセンス。これこそ、ラムセスがわがままで小心な権力者であることを示している。金日成の3代目として北朝鮮のトップとなっている金正恩も多分、同じような状況になれば同じような行動をとるのでは・・・？

そんな危機的状況下で、やむをえずモーゼが「俺はヘブライ人の子だ」と名乗り出たのは仕方ないが、それによって、モーゼはラムセスから国外追放されることに。ちなみに、この国外追放は名目だけで、事実上は砂漠で死ぬ、という命令だ。そんな事件を契機として、紀元前1300年当時の繁栄していたエジプト国は、以降大きく変わっていくことに・・・。

■□■生き延びて結婚し父親に。なのに、なぜ帰還を決意？■□■

「出エジプト記」は、モーゼの身の上起きた奇跡をいくつも見せつけてくれるが、最初の奇跡はエジプトを追放されたモーゼが砂漠の中をさまよった挙句、生き延びたこと。ラムセスの母親トゥーヤは、モーゼを砂漠に追放しただけでは安心できなかったらしく、追っ手まで差し向けたから、息も絶え絶えのモーゼは本来ならそこで殺されているはず。しかし、モーゼの乗った馬には、「互いに兄弟と思え」という教えの下に前国王から授けられた剣があったから、モーゼは2人の追っ手を返り討ちにすることができたわけだ。そこで疑問なのは、ラムセスはなぜモーゼにその剣を渡していたの？ということだが、それは人間の心理のアヤとしてしっかり理解したい。

そんな奇跡あるいは多くの偶然の積み重ねの中で、モーゼは紅海のティラン海峡を渡り、ミデヤンの地に辿りついたわけだ。そんなモーゼが地元の美しい女性ツィボラ（マリア・バルベルデ）と互いに一目惚れ（？）し、父親エトロ（ケヴオルク・マリキャン）の許しを得て結婚し、一人息子ゲルシヨムまでもうけることができたのはラッキーとしか言いようがない。しかし、そんな平和で安定した家庭生活のままでも安穩としないところが、「出エジプト」のミソだ。ある日モーゼはエジプトに帰還することを決意したが、それは一体なぜ・・・？

■□■モーゼと神との出会いは？映像上に見る神の姿は？■□■

チャールトン・ヘストンが主演した名作『ベン・ハー』（59年）では、自分が奴隷船でオールを握らされている間に、ハンセン病に冒され、谷に捨てられてしまった母親と妹を連れ出したところで、「ナザレのお方」＝イエス・キリストと出会うことになる。それに対

して本作では、モーゼが神が住むと言われるシナイ山に1人で入ったところで、イエス・キリストではなく、神そのものと出会い、その声を聞くことになる。ここでは、モーゼがシナイ山で出会う神とは何モノかが大きなポイントだが、それをここでバラすわけにはいかないで、あなた自身の目でしっかりと。

ちなみに、私は今、デアゴスティーニ・ジャパンの「東宝・新東宝 戦争映画 DVD コレクション」を定期購入し、時々観ている。私が大学時代に観た『日本海大海戦』（69年）では、ほんの少ししか明治天皇はその姿を見せなかったが、それより約10年前に製作された「天皇三部作」たる①『明治天皇と日露大戦争』（57年）、②『天皇・皇后と日清戦争』（58年）、③『明治大帝と乃木将軍』（59年）では、嵐寛寿郎が明治天皇を堂々と演じていた。また、岡本喜八監督、三船敏郎主演の『日本のいちばん長い日』（67年）でも、昭和天皇はほとんど後ろ姿だけしか見せなかったが、今年公開される予定の、原田真人監督の『日本のいちばん長い日』（15年）では本木雅弘が昭和天皇に扮し、鈴木貫太郎や阿南惟幾陸軍大臣に直接話しかける場面もあるらしい。そんなことも比較しながら、本作で、モーゼの目の前に登場する神の姿に注目！

■□■帰還したモーゼの要求は？交渉のバックアップは？■□■

モーゼがシナイ山で神から受けた啓示は、「同胞を助けよ」というもの。そう聞いてしまえば、妻のツィボラから、長男ゲルシヨムを含む平和な一家の暮らしを捨ててエジプトに戻るのはやめてくれといくら懇願されても、モーゼはエジプトに戻るしかない。約10年振りに戻ったエジプトで、モーゼがラムセスにいきなり要求したのは「ヘブライ人奴隷を解放せよ」だが、いくら何でもそりゃ無茶というもの。昔は兄弟同然の待遇だったとはいえ、今は単なる1人のヘブライ人にすぎない男が、エジプト国王に対して、上から目線で「奴隷を解放せよ」と要求してもそれが受け容れられないのは当然だ。したがって、「出エジプト記」のそこらあたりのストーリーは粗雑と言わざるをえない。

しかし本作では、ラムセスが当然のようにモーゼの要求を拒否したことに対してモーゼが見せる「武力」を含むさまざまな威嚇行動や、それでは何の圧力にもならないと判断した神が見せる「10の奇跡」による神の御業（の威力）が見どころになる。本作中盤で、映像の巨匠リドリー・スコット監督が見せる「10の奇跡」はそれぞれ興味深いのが、こんな無茶なことを続ければ、エジプト人のみならずヘブライ人だって絶滅してしまうのでは？

現在「イスラム国」によるテロを中心として、イスラム教とキリスト教の対立が深まっているが、キリスト教（＝十字軍）が中世にみせた残酷さは歴史上ハッキリしている。それと同じように、古代エジプトで、スクリーン上に堂々とその姿を見せた神が、モーゼと相談しながら（？）次々とくり広げていく「10の奇跡」のサマは、モーゼならずとも「いい加減うんざり！」となるはずだ。口先だけで何も実行しないのは最悪で、有言実行は大

切な事。しかし、「ヘブライ人の長子は大丈夫だが、エジプト人の長子は国王の子といえども例外なく、今夜死ぬ！」と予言されたうえ、そのとおりきっちり実行されれば、ラムセスが怒るのは当然だ。織田信長が命じ、明智光秀が実行した「比叡山焼き討ち」は歴史に残る暴挙だと非難されているが、その暴挙ぶりだって「10の奇跡」で神が見せる暴挙に比べれば、かわいいもの・・・？

■要求の「受け入れ」により、「出エジプト」が現実！■

モーゼが「もういい加減にしてくれ」と訴えるほど、その残虐ぶりが目立つ「10の奇跡」によって、国王ラムセスの顔にもブツブツができてしまったうえ、最愛の息子の命まで失うことに。そこでやっと音をあげた(?)ラムセスはモーゼに対してヘブライ人奴隷の解放を認め、「エジプトから出て行け！」と命じることに。

今は、先進資本主義国が外国人労働力をどのように受け入れて国力を維



エクソダス:神と王 DVD発売中 20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン
(C)2015 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.

持するのかが大きなテーマとなっているが、その視点で見ると、労働力の根幹となっているヘブライ人奴隷をすべて解放してしまえば、そもそもエジプトの国力が維持できなくなるのでは、という根本的疑問がある。現に、ラムセスとモーゼとの「交渉」や、ラムセスとラムセスの側近たちとの会議の中では、そういう現実的な問題を具体的に提起して利害得失が議論されていた。しかるに、エジプト人の長子を一晩で皆殺しにしてしまうという「神の御業=暴挙(?)」を見せつけられたことによって、ヘブライ人奴隷の解放を認めてしまえば、エジプトの労働力が不足してしまうのでは・・・？

私は本来「出エジプト」の論点はそういうところで整理すべきだと思うのだが、旧約聖書に書かれている「出エジプト記」にはそういう論点は書かれていない。そしてここでは、やっと獲得できたラムセス国王による「奴隷解放宣言」に従って、喜々としてエジプトから出ていこうとする40万人のヘブライ人奴隷たちの姿と、彼らを「皆殺しだ！」と方針転換したことによってクライマックスに向かうストーリーが続いていくことになる。しかし、冷静に考えてみれば、ラムセスはいったんは「出て行け！」と命じたのに、なぜその後「皆殺しだ！」と方針転換したうえ、戦車部隊を中心とする追っ手を組織し、自らその先頭に立ったの？もし、それを成功させたら、エジプトは本当によくなるの？ラムセスは国王としてそういうことを本当にきちんと考えたの？誰でもそんな根本的な疑問が湧くが、リドリー・スコット監督が本作で描く、そこらあたりの人間ドラマは・・・？

■□■クライマックスのスペクタクル性と映像美を堪能！■□■

湯川遥菜さんと後藤健二さんという2人の日本人人質の死亡を契機として、日本でも近時イスラムや中東に対する関心が広がっているが、さてそれはいつまで続くのやら・・・？ また、それを契機として集団的安全保障体制のあり方を中心とした「安保法制」の見直しが急速に進められているが、今なお「見直し不要論」も根強いから、それもどうなることやら・・・？

日本という国は人口が1億人以上いるから、民主主義のルールに則って治めていくことがいかに大変かを私は日々痛感している。それに比べれば、モーゼが率いているのはたかだか40万人。しかし、今と昔では、水や食料品そして交通事情等が全く違うから、モーゼが当面の目標としている「出エジプト」の実現は大変。背後からは今、ラムセス率いる戦車軍団が迫り、目の前には海が広がっていたから、モーゼとその民は万事休す。今さら背水の陣を敷いてエジプトの戦車部隊と対決しようとしても、こちらは難民ばかりだからとても無理。このままでは、比叡山の焼き討ち以上に大規模な40万人のヘブライ人の虐殺事件が起きることは火を見るより明らかだ。

ここで、モーゼが「出エジプト」を目指しながら、紅海のティラン海峡を渡る道を誤ったことをさかんに後悔したことはまちがいない。しかし、いくら後悔しても、それはまさに後の祭り。目の前は海なのだから、それを渡るのは不可能だ。そんなギリギリの状況下で、「海が割れるのよ、道ができるのよ」という奇跡的狀況が出現したのは歴史上の事実のはず。しかし、『十戒』にみたチャールトン・ヘストン演じるモーゼは、自分が神に頼れば海の中に道が開けることに確信を持っていたが、本作にみるモーゼは全く違うところが興味深い。

すなわち、本作にみるモーゼは自分が道を誤ったことにすっかり自信を喪失し、王から受領していたあの剣を絶望的に海の中に投げ捨てたうえ、いわば「ふて寝」を決めこんでいたわけだから、こりゃ40万人のヘブライ人の民のリーダーとしての資格には問題ありと言わざるをえない。また、私の想像では、この時点でモーゼはおそらく、なぜ目の前に神が現れて我々の進むべき道を教えてくれないのか、と神に対して不満を持っていたのでは？しかし、少しずつ海の水が減り始め、海の中に捨てたはずの剣の束が見えてきた時点で、モーゼの神に対する信頼は再び復活したはずだ。海が割れるシーンやそこを40万人のヘブライ人が渡るシーンのスペクタクル性と映像美は『十戒』もすごかったが、本作も当然それが売りだから、そのスペクタクル性と映像美を堪能したい。

■□■モーゼの「十戒」をどう位置づける？■□■

本作のパンフレットには、市川裕（東京大学教授／宗教学）の『『出エジプト記』の意味するもの』という解説があり、そこでは、「大事なものは『出エジプト』を成功させ、自由の

身になってからだ」と述べている。『十戒』でも、「出エジプト」に成功したヘブライ人の民が偶像を崇拜し、酒宴に明け暮れるバカさ加減が描かれていた。『十戒』では、それが「汝殺すなかれ、汝盗むなかれ」等の、神が定めた律法たる「十戒」に結びついていったわけだが、そこらあたりの宗教的な話になると日本人は苦手だ。ナポレオンだって軍事戦略の天才としての面はよく知られていても、ナポレオン法典を作った立法政策者としての面について日本人は苦手だ。『キング・オブ・キングス』（61年）ではイエス・キリストの姿をほとんど見せず、『日本のいちばん長い日』でも昭和天皇の後ろ姿しか見せなかったのと同じように、『十戒』でも観客は神の姿を直接見ることはなかった。しかし、前述のようにリドリー・スコット監督は本作に神を堂々と登場させているうえ、モーゼが「十戒」を作るについての、神との共同作業(?)の様子まで見せてくれる。



エクソダス：神と王 DVD発売中
20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン
(C)2015 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.

私が司法試験受験のために民法や刑法の勉強を始めたのは1970年だから、今から45年前。ところが、その後の45年間だけでも刑法は大きく変わったし、現在は民法の債権法の分野で、大改正に向けた準備が着々と進められている。「法治」という考え方はナポレオン法典の時代から始まったもので、紀元前1300年のエジプト国に法治の概念があったわけではない。つまり、「汝殺すなかれ、汝盗むなかれ」等の「十戒」は律法として定められたもので、これはいわば神との契約だ。市川裕氏の解説には、『律法』は出エジプト記の後、レビ記、民数記、申命記と続いていく。これらこそが神の啓示の中心部分で、それらはまさに『荒野の40年』の厳しい試練の記録に他ならない」と書かれているが、モーゼの「十戒」の意味を読み解くためには、この解説を含むしっかりした勉強が不可欠だ。

さらに、今の時代の視点で言えば、本作が描いたのはヘブライの神との契約だが、現在さかんにテロ行為に走っているのは、イスラムの神との契約にもとづく義務を実践していると信じているイスラム教徒たち（の一部）だ。世界にはキリスト教だけでなくイスラム教や仏教もあり、その信者もたくさんいる。キリスト教と仏教の衝突は世界的には少ないが、キリスト教（十字軍）とイスラム教との衝突は2000年以上続いている。したがって、一概にキリスト教が正しくイスラム教が悪いというのはまちがいだ。そんな、キリスト教とイスラム教の対立という現代の局面にも目を向けながら、紀元前1300年にヘブライ人の神との契約によって生まれた「十戒」の意味するものをしっかり考えたい。

2015（平成27）年2月17日記